

第四矢 底なる魚

——仁平元年（一一五二）閏四月四日、土御門大路・安倍泰親邸

1

頼政は隼太を伴い、初夏の平安京を歩いていた。

敗退から一カ月余り、白昼の土御門大路は賑やかで、鶴が跋扈する魔都だとは思えない。

道行く若い娘を見て、頼政は三日前の螢火との逢瀬を思い起こした。

——頼政さまがお元気そうで、本当にうれしゅうございます。

宮中で鶴退治の失敗を聞き、心を痛めていたらしい。

四月の朔日は大雨だった上に、頼政は黒雲の邪気にやられて寝込んでおり、穢れも心配で会えなかったから、二カ月ぶりだった。無惨な戦いについてはほとんど話さなかったが、すなおな螢火に歌の手ほどきをするのは楽しく、慰めになった。

よい歌を作ろうと、気負わなくていい。自分の気持ちを感じるまま、言葉に乗せればいいと伝えた。お題は、何となく恋を避けて、雲や花、季節にした。順番に初句を口にして二人で作るなど、さまざま遊ぶうち、螢火も勘所を掴んできた様子だった。

待賢門院派の女官という難題はあれ、鶴退治にさえ成功すれば、家成が何とかしてくれよう。頃合いを見て、相談してみるつもりだった。

「殿、着きましたぞ」

われに返って門番に用向きを告げると、中原がそそくさと現れた。

「これはこれは、頼政殿」

鶴は闇の中で中原を襲った後、隣にいた後輩の陰陽師を殺して喰ったらしく、中原は命を拾った。泰親から賜った霊符を幾重にも布に包んで懐へ入れていたおかげで、傷も意外に浅く済んだ。そうで、すでに復帰していた。

「御子の見舞いに参った。今日で忌明けじゃったろう？」

あの黒雲の中に身を置いた者たちは一様に具合が優れず、寝込む者も相次いだ。靈感が強いせいか、泰親は特にひどいという。

「わざわざご足労くださり痛み入ります。されど物忌みの最中にて、本日も面会は叶いませぬ」
中原は人のよさそうな顔に、戸惑いの色を浮かべていた。

「待たんか、中原。こたびは何の物忌みじゃ？」

数日前に来た時は、家畜の産で穢れたとの話だったから、物忌みは三日間だ。隼太と指折り数え、忌明けのはずだからとやって来たのである。

「実は今朝がた、さる公卿がお見舞いにいらしたのですが、そのお方が身内を亡くされたことが後でわかりました。触穢になりますゆえ——」

「その公卿の御名は？」

間髪いれぬ隼太の問いに、中原はドギマギした様子だ。

「く、公卿のご失態なれば、差障りがあつて申し上げられませぬ。主の体調も未だ優れませぬ……」
隼太が中原を睨みつけている。弟の死は自分のせいだと悔やんでおり、頼政もかける言葉が見

つからなかった。

「されば、こいつを御子に渡してくれい。中身のたっぷり詰まった餅餠へいだんじゃ。滋養が付くぞ」

「有難きお心遣い、痛み入りまする」

中原はペコリと頭を下げ、両手で包みを受け取った。

「のう、中原。あの戦いで命を落とした武者たちは、気のいい連中じゃった。皆、わしらを信じて戦ってくれた。御子も具合が良くなったら、鳥辺野とりべので手を合わせてやってほしいんじゃ」

このひと月、頼政は馴染みの坊主に頼み、殺された者たちで引き取り手のない骸むくろを吊い続けてきた。鳩次きゅうじの骨は、故郷の遠江ととおみまで運んで供養くようした。

「しかと、主に申し伝えまする」

「亡くなった陰陽師たちの卒塔婆そとうばに、わしも手を合わせたいんじゃがな」

「忌明けに改めてご案内いたします。されば今日はこれにて——」

立ち去ろうとする陰陽師の細腕を、頼政が掴んだ。

「中原。いま一度、大事な伝言を頼む。わしらは亡き者たちの仇を討たねばならん。されば、次はいかにして戦うか、御子と膝を交えて談合したいんじゃ」

鳩次を始め、多くの者が鶴に殺された。喰われた者もいる。武人として、落とし前を付けねばならぬのだ。あの夜、頼政は鶴とじかに戦ったわけではない。戦えば討てると考えていた。

困り顔の中原は、やがて意を決した様子で応じた。

「私わたしとて、朋輩ともがらを幾人も殺された身。悔しきは同じでございます。されど、左府様ひだりふからのご命令があれば格別、安倍本家としてはこれ以上、鶴に関わるわけには参りませぬ」

「何じゃと？ 負けたままでやめると申すのか？」

「相手は人に非ざる異形。勝ち負けの話ではございませぬ。頼政殿、どうか当家の立場をおわかり下され」

あれほど派手に仕組んだ見世物で無様に敗退したのだ。指御子の声望は大きく傷ついた。だからこそ、再戦に挑むべきではないのか。

頼政が説いても、中原は申し訳なさそうにかぶりを振るばかりだ。

「じゃが、また十五夜が参る。このまま捨て置かば、また都人が襲われよう。誰かが、鶴を倒さねばなるまい」

——鶴の姿を見た者は、必ず死ぬ。

不確かな風説が流布するほど、鶴の恐怖は喧伝されていた。都を逃げ出す貴族や都人もいる。

「ありていに申さば、われらの術は、鶴にほとんど通用しませんでした。正統の陰陽師では、あの異形には勝てませぬ」

中原は身を乗り出し、声を落とした。

「さるお方なら、鶴を倒せるやも知れませぬ」

「おお！ 誰ぞ、力になってくれる陰陽師がおるんか？」

「禁断の陰陽道を歩んでこられたお方で、今は凶書頭を務めておわします。御名は、安倍広賢殿」
名は聞いた覚えがある。確か家成が懇意にしている陰陽師だが、歌合せの場でも禁裏でも会ったことはないはずだ。

「この中原、影ながら頼政殿の勝利を祈禱いたしております」

去ろうとする中原の背に、隼太が鋭く言葉を投げた。

「ひとつお尋ねしたい。巷ちまたでは、わが主のせいで鶴退治に失敗したとの噂が流れており申す。貴殿から詳しく話を聞いたという者もおりましたぞ」

「取り込み中にて、御免仕りまする」

中原はまたペコリと頭を下げ、逃げるように立ち去った。

「そんな噂が流れとるんか？」

瀟洒しょうしやな正門を出ながら頼政が尋ねると、隼太が齒軋さすのみこりした。

「指御子は諦めずに最後まで戦った。されど、殿が真つ先に逃げ出したせいで負けたという話になつており申す」

安倍本家の者たちが広めている風聞らしかった。泰親は負傷しながら術を施していたが、頼政は暗がりでは何をしていたか、誰も見ていない。黒雲が去った後は、わんわん泣いていた。あの闇の中で何が起こったのか、正確に知る者は誰もいなかった。

「殿はすっかり臆病者、悪者に仕立て上げられ申した。泰親殿が物忌みを理由に会わぬのも、そのためでござる」

無名で無官の頼政と違い、泰親は失うものが多いからだろう。

「一緒に戦たたかうた仲じゃのにな……」

友だと思っていた。腹が立つというより、ひどく悲しかった。

中原はあのまじめ顔で、頼政を貶める中傷を広めているわけか。主の名誉を守るために必死とはいえ、どんな気持ちなのだろう。

「殿に命を救われながらの裏切り、赦せませぬ。真実を伝え歩かねばなりませんまい」

「やめよ。負け犬の遠吠えは、自分を貶めるだけじゃ」

「では、根も葉もない悪評を捨て置かれるおつもりか。人がよいにもほどほど、がありますぞ」

「負けは負けじゃ。武士に言い訳など無用。汚名を雪ぐすすには、鶴退治こそが妙薬よ」

ひとり頼政の名誉のためではない。鳩次や生臭坊主を始め、戦って死んだ者たちの無念を晴らすために、成すべきことはただひとつだ。

渋々うなずく隼太の肩へ手を回した。

「とにかく会あうてみようぞ。禁断の術を使うという陰陽師に」

土御門大路を西へ歩いた。

昼間の大通りは、鶴などどこ吹く風と、賑やかな喧騒で満ちている。

この間、頼政と隼太は、命を拾った仲間を訪ね歩いた。鶴を倒すには、その正体を知らねばならぬと考えたからだ。

行方が掴めない者もいたし、頼政を逆恨みして会おうとしない者までいた。

多くは鶴を見ることなく、怖くて逃げ出したと打ち明けたが、それでも今までと違い、鶴と戦って生き延びた者たちが幾人もいた。

「黒雲の中で何を見たか」という問いへの答えは、人により全く違った。

——大蛇じゃった。恐ろしい牙を剥いて襲いかかってきおってな。隣の奴が噛み殺されとる間に、わしは命を拾ったんじゃ。なんまんだぶ。

——蛇の鱗うろこが篝火かがりびに黒光りして、気味悪うごございましたな。すぐに逃げましたわい。

辛くも生き残った者たちを手当てした薬師たちも、紫に変色した骸の皮膚を見て、蛇毒が原因ではないかと漏らしていた。

蛇と同じくらい多いのは、虎だ。

——鶴は虎ですぜ。顔は見てねえが、刀みてえに長い爪で、わしのすぐ前にいた男の体を引き裂いたのでごせえやす。

——わしも、猛虎のでっかい手が男の頭を叩き潰すのを間近で見えておりましたぞ。体に縋があったかって？ ううむ、何しろあの暗さだ。そこまではわかりませんな。

頼政と同じく猿を見たという者が二人いたが、胴は意外に細くて狸か狐のようだったと語る者が数名いた。

聞いた話から鶴の姿を想像すると、ずいぶん奇妙な生き物になってしまう。

頼政が刀を交わした黒天狗を見た者は、他にもいた。

——もう一度、わしと一緒に戦わんか？

隻眼も赤鬼も、黙って首を横に振った。生き残りたちは二度と御免だと口を揃えた。

「それにしても、われらの前に訪ねたのは、誰でございましょうな」

聴き取りをした際、ぼろ服の唱聞師しょうもんじからも、鶴について根掘り葉掘り尋ねられたと言っていた。

前方に宴ノ松原が見えてきた。図書寮はその奥だ。

(螢火は、どうしとるかかう……)

一緒に手を洗った井戸端を見て、頼政はまた会いたくなかった。

「お頼み申す。源頼政でござる。図書頭、安倍広賢殿にお会いしたい」

玄関で、図書寮中に響き渡る大声を出すと、胡散臭うさんそうな顔つきの小役人が現れた。

「図書頭なら、一昨日から伊勢へ行かれましたがな」

いつ戻るか、聞かされていないし、見当もつかないという。

取りつく島もなく寮を出ると、まだ空は明るかった。

「隼太、また森へ行ってみるか」

鶴の巣は、黒雲が立つ東三条ノ森にあるはずだった。多くの者が調べているが、まだ見つかっていない。

「合点でござる」

宴ノ松原から吹く薫風くんぷうが、頼政主従を柔らかく包んだ。

2

忠通の屋敷の釣殿つりどのに家成が通されてから、優に一刻は過ぎた。

部屋に焚き染められていた麝香じやくかうの空薫物の香りも、すでに失せて久しい。

(焦らしおるのう……)

閏四月にしては暑い日で、風もなかったから、汗っかきの家成は、東帯姿そくたいで体じゅうに嫌な汗を掻いていた。

あくびを一つしてから、手持ちぶさに笏しやくで膝を打った。

三月の敗退からふた月余り、周到な泰親はちゃんと逃げ道を作ってあった。禁裏じんぎかんでは神祇官の卜部うらべと太政官中務省の陰陽寮だじょうかんで占いが行われるが、国家の大事ゆえと、あえて予め卜部に伺い

を立て、お墨付きを得ていたのである。卜部も推し進めた退治であり、敗退は泰親だけの落ち度ではないとしたわけだ。

(それにつけても、頼政は哀れじやな)

家成は頼政から聞いて実情を知っていたが、安倍本家の家人たちが嘘八百を吹聴して回った結果、都人の間では、臆病者の頼政さえ指御子の足を引っ張らねば、鶴を討ち取れたはずだとまで言われ、門下を失った泰親への同情さえ寄せられていた。

(待賢門院派は今、守りに入っておる)

惨憺たる敗北を受けて、公卿たちはまず呆然とした。頼長と泰親の失敗を責めたいはずの政敵たちも、代わりに鶴退治をやらされてはたまらない。ゆえに、鶴については見て見ぬふりをし、だんまりを決め込んでいた。

政に長く身を置けば、人間は誰しも墮落する。何代にもわたって権力の座にあれば、なおさらだ。民のことなど思案の外で、のらりくらりとその座にあり、保身に汲々とする公卿の何と多いことか。諸大夫から己の力でのし上がってきた家成のほうに、はるかにまじだった。

——よき思案が浮かばぬ時は、ゆるゆると時期を待つべし。

——毎月十五夜に生贄いけにえを捧げれば済む話じゃ。さしあたり、罪人でも喰わせておけばよかる。

その昔、八岐大蛇に生贄が捧げられていたのも、同じ理由だったに違いない。

——おや、家成卿が鶴にご執心なら、万事お任せいたしますぞ。

京では、腐敗した政が耐え難い悪臭を放っていた。

何もかも今のままだいい。何かを変えたいなら、言い出した者がやれ。ただし、己の保身に関

わるなら、徒党を組み、全力で反対する。

無責任な押し付け合いに、ほとほと嫌気が差した。さりとて、自分がわざわざ危ない橋を渡る理由もないから、家成も鶴を放置すると決めた。

四月に現れなかった鶴は一昨日、閏四月の十五夜に武者十名を屠った。

そして、公卿の誰もが素知らぬ顔をするなか、宮中で事件が起こった。

十五夜の黒雲が現れるたび玉体の不調を訴えられていた帝が、ついに高熱を発せられ、病の床に臥されたのである。鶴の黒雲は次第に濃く、大きくなっていった。憂慮すべき報せを受け、鳥羽院から家成に対し、鶴退治につき下問があつた。

事は異形の出現にとどまらない。帝の御身だ。

帝は、家成の従妹に当たる美福門院のお子にあらせられ、万一崩御ともなれば、家成はもちろん、院の力も大きく削がれかねない。美福門院派としては鶴退治を真剣に考えざるを得ず、家成はやむなく忠通を頼り、屋敷を訪れたわけである。

ようやく呼び出しがあり、寢殿へ通されると、忠通は文机に向かい、書をしたためていた。

「心ならずも官職を離れ、手すさびに書に勤しんでおったものを。何用か」

さんざん待たせた詫言もなく、忠通は皮肉から始めた。

「お聞き及びと存じますが、近ごろ帝のお加減が優れませぬ」

帝には、忠通が養女にした皇子が嫁いでいる。同じ派閥であり、放置はできぬはずだった。

「よき薬師がおそばにおらぬのか」

忠通はさらさらと筆を走らせながら、何もない顔で問うてきた。

「こたびの熱病は、鶴の仕業によるものと見立てており申す」

「ほう。役立たずの悪左府は、何をしておる？」

忠通は憤慨して見せたが、手の筆は忙しげに動き続けている。

「ご高承のとおり、先だっでは指御子が惨憺たる敗北を喫しました。かくなる上は、ぜひとも関白殿下のお力をお借りいたしたく」

忠通は書き上げたばかりの書を手に取り、ためつすがめつ眺めた。

「うむ。われながら、悪くはない」

達筆な人間は、まじまじと自作を見て、出来栄を確かめる癖がある。その誇らしげな仕草が厭味つたらしく、家成は嫌いだった。

「恐れながら、帝には呈子様が入内しておわします。鶴を捨て置かば、その御身に鶴の害が及ばぬとも——」

言わずもがなの家成の付け足しを、忠通が筆先で制した。

「鶴を倒すなら、ひとつ条件がある」

忠通は家成に向かい、ふっくらした頬に片笑みを浮かべた。

「鷹を左大臣にせよ」

家成は覚えず声を上げそうになった。弟から官職を取り上げて自分に戻せとは、院に対し、頼長と手を切れという威迫に等しい。

「お待ちくださりませ。ただか異形一匹で、ちと乱暴ではございませぬか」

院は忠通の専横を怖れ、牽制するために頼長を取り立ててきた。兄弟の力の均衡こそ、院から

家成が与えられた難しい役目だった。

「鶴退治を機に、頼長を潰す。そちらは美福門院様のために、ちゃんと仕事をせい」

再び紙に筆を走らせながら、忠通は子供を叱るように言う。

「板挟みになる麿の立場も、お察しくださりませ」

たまりかねた家成は、自分も同じ派閥で、忠通の味方だと泣きつくように訴えた。

「麿は、その先も思案しておるでな」

家成は愕然とした。

そうか。忠通にとっては、養女の一人や二人、どうでもよいのだ。この男はすでに帝亡き後の政争さえ睨んでいる。美福門院と一蓮托生いちれんたくしょうの家成と違い、忠通は幾つもの手を打てるわけだ。

「……しばし、思案の時間を賜りたく」

両手を突く家成に、忠通は手の筆を軽く上げて応じた。

家成がうなだれて忠通邸の門を出ると、牛車の傍らで元興寺がごせが待っていた。

「広賢を呼べ。大急ぎじゃ！」

音もなく老僕が消えた後、家成は牛車に揺られ始めた。

忠通の独り勝ちでは、家成の身さえ危ない。頼長の専横を押さえつつ家成が力を持つことが望ましいが、そのためには忠通に頼らず鶴を倒すしかなさそうだ。

（平 忠盛を、使うか）
たいらのただもり

武家の中で、平氏は今や最大の力を誇った。だがもし惨敗すれば、美福門院派にとって大きな

痛手だ。他方、見事退治すれば、平氏が力を持ちすぎる。今のままが一番良いのだ。

(磨ためよしとしたことが、下手を打ったわ。為義ためよしにやらせるべきじゃった……)

だが、今さら河内源氏かわちが虎穴に入りはせぬし、頼長も許すまい。

(ならば、他に誰がおる?)

自問しながら、家成はあわわノ辻で、みっともなく大泣きしていた男を思い出した。

頼政は鶴から真つ先に逃げ出した男として、三尺の童からも馬鹿にされていた。ぶざまに負けた挙句、共に戦った盟友にも裏切られ、もう完全に終わった男だ。誰も組むまい。

(やはり、平氏しかあるまい)

家成はひとたび懸案を抱えると、他には何も考えられぬたちだ。

屋敷に帰ってからもんもんも悶々と悩むうち、広賢の来訪が告げられた。

気付けば、もう夕刻か。

「実は帝のご容態が優れぬのじゃ。鶴と関わりがあると思うか？」

優男やさしの仏頂面ぶつちやうめんを見るなり、家成はぶつきらぼうに問いをぶつけた。

「まだわかりませぬ」

広賢がそっけなくかぶりを振った。愛想あいきらの欠片もない男だ。

「面倒くさいが、鶴を倒さねばならん。できるな？」

「さて。思案の最中にござる」

ぶつきらぼうな返事に、家成は不機嫌になった。

「時はたつぷり与えておいたはずじゃぞ」

「隠し事をなさっているのは、謎を解くにも、遠回りをせねばなりません」

家成はジロリと広賢を睨みつけてから、溜め息をひとつ、吐いた。

「先だっては麿も邪魔をした。じゃが、あの様子では、どのみち無用じゃったろう」

家成が自らの妨害と、忠通とのやり取りを含めて裏の事情を話しても、広賢は眉宇ひとつ動かさなかった。

「関白がさように強気に出るのは、布留部を手駒に持っているからでござろう」

家成は肩越しに後ろを振り返った。

「元興寺、布留部について掴んだことを話せ」

「はっ。かの者、都での悪評と異なり、鎮西では〈奇跡の左手〉を持つ〈夜の陰陽師〉として、なかなかの評判であった様子」

布留部は夜に話を聞き、術を施した。占いは的中、難病を治し、怨霊も祓ってくれると、口伝えで名が知られるようになった。手印を結び、術を施す左手が次々と奇跡を起こすとの噂を聞きつけ、遠方から訪ねる者たちもいたという。

広賢がわずかに顔色を変えている。

「されど、五年前に鎮西から姿を消した後の足取りが、未だ掴めませぬ」

「関白が手を回しておるなら、探すのは難儀するじやろう」

忠通の息が掛かっている公卿、貴族、社寺は京だけで数百はあろう。十二万人が暮らす広い平安京で探し出すのは、至難の業だ。

褒賞目当てのどこぞの武士が生贄代わりに死ぬだけならよいが、帝が病臥なさるに及び、第一

の院近臣が何もせぬでは、いかにも見栄えが悪かった。

「布留部については逐次、元興寺から伝えさせる。帝の御身に何かあってからでは取り返しがつかぬでな。武士のほうは麿が手配するゆえ、必ず鶴を退治せよ。よいな、博士？」

家成が早口で告げると、広賢は無言で両手を突いた。

3

初夏の真つ昼間でも、鬱蒼とした緑に覆われる東三条ノ森は、薄暗く肌寒い。それでも、宴ノ松原と違つて快い風が吹き、不思議と邪気を感じなかった。

隼太が桂かつらの木の梢を見上げている。

「この辺りで、何か感じませぬか？」

頼政は瞼まぶたを閉じて丹田たんでんに気を込め、全身の皮膚で息を試みたが、樹々のみずみずしい生気を感ずるだけだ。

「清々しい森じゃわい。今はおらぬな」

「必ず、どこかに棲んでおるはずでござる」

隼太はまったく靈感がないそうで、しきりに頼政に尋ねてくる。

先手必勝で鶴を討ち取るべしと、森には褒賞目当ての野武士や唱聞師しょうもんじが少なからず出入りしていた。踏み歩かれて幾つも道ができ、「京ななくちの七口」のひとつ、三条口には市まで立つ始末で、この森も今では「鶴ノ森」と呼ばれている。

「殿、先へ参りましょうぞ」

摂津源氏再興のほか、鳩次らの仇討ちという目的が加わった。

頼政と隼太は刀を帯び、弓矢も背にして、三日に上げず鶴ノ森へ乗り込んだが、二人して木登りや藪漕ぎを繰り返しても、化鳥の巢らしきものは見当たらず、可愛らしい黄鶇きびたきが心地よさそうに囀なえずっているだけだった。

「やはり、夜に来ねばならぬようござる」

近ごろは十五夜以外にも黒雲が湧くと聞き、主従は真夜中に出かけたものの、空振りが続いた。ようやく昨夜、黒い霧の立ち込める森の中へ踏み込んだものの、鶴も巢も見つからなかった。

「あの竹林は、まだちゃんと調べとらん」

清新な林に入って半刻ほど歩き回ったものの、野兎の巢穴のほか、竹ノ子を見つけたただけだ。

「隼太、腹が減った。飯にしようぞ」

その場で生のまま食べるなら、土からわずかに頭を出した掌くらいの竹ノ子に限る。

頼政は地面から顔を出す小さな円錐を見つけた。落ち葉を掻き分け、周りから手で慎重に掘り出し、短刀でザクリと根元を切った。幾重もの皮を剥いて、かぶりつく。

ほどよい癖のある甘さが、口の中ではじけた。

二人で無心に四、五本食べた。

隼太は言葉少なで、涙ぐんでいるように見えた。弟を思い出しているのだろう。

「今日はこれくらいにして、竹ノ子を手土産に、広賢殿を訪ねましょうぞ」

中原に教えられた陰陽師の屋敷と図書寮を何度も訪ねたが、不愛想な家人によると、主は旅に出て、いつ帰るか知れないとの話だった。数日前に戻ったと知り、すぐに向かったが、またふら

りと外出したらしく、会えなかった。

歩き慣れた道に戻るうち、水の透き通る小さな池に出た。

「この辺りは、わしの大好きな場所じゃ」

丸い池を囲む樹々は鮮やかな新緑を宿し、水面は岸辺の緑に縁どられて、雲ひとつない澄んだ青空を映している。頼政たちに驚いたのか、魚影が素早く池の底へ消えて行った。

「魚たちには、月がどのように見えるんじやろなあ」

へ うき草を 雲とやいとふ 夏賦の池の 底なる魚も 月をながめば眺

夏池には浮草が繁茂している。夜に水中から見上げたら、雲のように緑が邪魔になって、魚たちには月があまりよく見えないだろうか。

「摂津源氏は今や、地獄まで叩き落とされた底なる魚でござる。這い上がるために、次こそ鶴を倒さねばなりません」

頼政が見た鶴は、鹿くらいの大きさだった。

姿さえ捉えられれば、二人で討てると言い合ったものの、思案の末、広賢に会ってからにしようとして決め、今月は戦いを見送った。十五夜は、野武士たちの戦いを神泉苑しんせんえんで観戦したが、結局、闇の中で人間が殺され、喰われる嫌な音を聞かされた。頼政は悔し紛れに数本の矢を放っただけで、誰かを救えさえしなかった。

「あの黒雲を、何とかできればのう」

丸池の澄んだ水で手と竹ノ子を洗ってから、二人は三条口へ向かう。

図書寮を訪ねても不在で、屋敷のある一条 戻橋いぢょうもどりばしを目指した。

「採りたての竹ノ子を飯に入れれば、最高の美味よ」

「広賢殿はかなり気難しい方のご様子。くれぐれも短気を起こさせぬよう」

隼太が仕入れた噂話によると、相当の変わり者らしく、良い評判は皆無だった。

歌のひとつも詠まず、誰とも付き合わない。ふだんは図書寮で古い書物を読み漁るか、自邸で怪しげな術を試している。何か思いつくと、真夜中でもふらりと出かけ、あるいは旅に出たまま何カ月も戻らない。寡黙なくせに、口を開けば毒舌ばかりだという。

「知つとろうが、わしは誰の機嫌取りもせんぞ」

誰かの顔色を窺い、おべっかを使うなど、鳥羽院の御前でさえ、やったことがない。

「喧嘩さえなさらねば、結構。鶴を倒すためにござる」

小さな石橋を渡り、広賢の屋敷に着いた。ここの門前に立つと、いつも清々しい風が吹くような心地がする。

「先生は、先ほど出かけられました」

西門で来意を告げると、いつもの不愛想な家人が現れた。

「いつお戻りじゃな？」

「さあ。神仏にもわかりますまい」

「しばし、中で待たせてもらえんか？」

「それでお気が済むのですたら」

この屋敷の人間は皆、不愛想に徹するよう、主から命ぜられているのではないか。

「美味しい竹ノ子を持って参った。存分に味おうてくれい」

「それはそれは」

家人はニコリともせず受け取ると、ついて来いとばかりプイと先に立った。

掃き清められた廊下を歩き、西ノ対にしの小部屋こむろへ通された。

入った瞬間、嫌な感じがした。

「こちらでお待ちを。この部屋からは、決してお出になりませぬよう」

会釈もなく家人が立ち去ると、頼政は部屋を見回した。何の変哲もない狭い部屋だ。

三方の襖はぴたりと閉じられ、庭に面する側には厚いすだれが掛かっている。大きな屋敷でも

塗籠ぬりごめ以外は衝立ついたてや屏風などで区切るのが普通だから、珍しい造りだ。掛軸ひとつない代わりに、

書物や奇妙な道具が置かれ、半ば物置になりかけていた。およそ来客を通す部屋ではない。

すだれ越しの風を受けて、頼政は丹田がヒヤリとした。

視界を遮るすだれが鬱陶うっとうしい。頼政は昔から狭い場所が苦手だ。

邪気は外から来るようだった。屋敷に何か棲んでいるのではないか。

「どうも閉じ込められとるようで、かなわんな。……誰ぞ、おられんか？」

声を張り上げてみたが、返事はない。

やむなくすだれを少し上げると、小さな池の対岸に釣殿つりどのが見えた。四方が閉じられた変わった

造りで、入口の脇に奇妙な紋様が描かれている。

(何じゃ、あれは……)

まがまが 禍々しい気配の出所は、あの建物に間違いなかった。鶴が現れた時と感じも似ている。

「隼太、鵜は恐らくこの屋敷におるぞ」

頼政は太刀を取って、立ち上がる。

「何をなさるおつもりか？ 他所様よそさまのお屋敷ですぞ」

隼太の鋭い囁きを背中で無視して、ずんずん中門廊ちゅうもんろうを渡った。

釣殿の前に立ち、引き戸に手をかけたが、建付けが悪いらしい。

力づくで一尺ほど開き、中を覗いた。

たちまちゾゾッと、頼政の背筋を悪寒が走り抜ける。

明かり取り窓だけの薄暗い部屋には、白い獣骨やら奇妙な祭具が所狭しと転がっていた。いかにも怪しい陰陽師だ。よからぬことを企んでいるに相違ない。

「戻られませ！ 広賢殿が帰られたようですぞ！」

隼太が庇ノ間から、鋭く囁く。

頼政は戸を閉じようとしたが、また何かが引っ掛かっている。変だ。

ええいと無理やり閉じると、中でガラガラガシャンと派手な音がした。

突然、釣殿から、丹田を刺すような強い邪気を感じた。

頼政は覚ええず飛びすきる。

「いかん！」

中門廊の手すりの上を、頼政の体が越えてゆく。

空中で泳ぎ、頭からバシヤンと池の中へ落ちた。

濡れ鼠になって慌てて半身を起こした時、冷たい声が出た。

「さような所で、何をしておる？」

見覚えのある男が胡散臭そうに自分を見ていた。傍らにおかっぱの少女がいる。

「お主、は……」

いつか大喧嘩した唱聞師の遠呂智おろちが、醒めた眼で頼政を見下ろしていた。

4

閏四月も末の昼下がりに、家成自慢の釣殿には、剣呑な空気が漲みなぎっていた。

「源頼政が武勇、天下に並ぶ者なしとは、三尺の童でも知っておる話よ」

家成が頼政を持ち上げるや、広賢が低音で口を挟んできた。

「こちらへ参る道すがら、四条大路で面白き狂歌を耳にしましてな。源散位げんさんい、尻尾を巻いて逃げにけり、鵜を相手に手も足も出ず、と」

「博士は京におっても、ひとり異界に棲んどのからの。じゃが、安倍広賢こそは知る人ぞ知る第一級の陰陽師よ。あの指御子さえ、一目置いておる」

「一度お祓いを頼みましたが、不世出えせの似非陰陽師じゃと、ようようわかり申した」
頼政がやり返すと、広賢が鼻で嗤った。

「今日の訪問は時も方角も凶であったが、的中したわ。心底軽蔑する人間に、三度も会おうとは」
また苦い沈黙が始まった。

家成は内心で頭を抱えながら、二人を順繰りに見た。柄になく称賛しても、頼政と広賢は互いを腐し合うばかりだ。

頼政はそつぽを向いて池で跳ねる鯉を眺め、広賢は瞑想するように端坐していた。

(何ゆえこの二人は、ここまで仲が悪いんじや……)

過日、行き詰まった家成が平忠盛・清盛父子に鶴退治を打診したところ、「賀茂家の占卜で大凶と出た」との理由で、丁重に断りを入れてきた。関白と繋がる陰陽師を持ち出したのは、もちろん忠通の意向を匂わせるためだ。大和源氏など他の武家にも当たってみたが、指御子の敗退を受けて誰もが保身に回り、引き受け手がなかった。家成が万策尽き果て、仕方なく頼政に声を掛けたところ、大いに喜んだ。そしてこの日、なかなか捕まらない広賢を引き合わせたのだが、すでにどこかで面識があったらしい。

(何としたものじゃろな……)

頼政は真夏に燃え盛る炎、広賢は真冬に吹きすさぶ木枯らしのような男で、相性はいま一つかと案じてはいたが、これほど反目し合うとは思っていなかった。

「面白い噂を聞いたぞ。真夜中の禁裏で、美しい女が素裸で月の光を浴びておるそうな」

「ほう」と頼政が応じたものの、広賢は眉ひとつ動かさなかった。

「中納言様、麦縄むぎなわをご用意いたしました」

見かねた元興寺が機転を利かせてきた。頼政は美味に目がない。

「おお、あの美味の揚げ菓子か！」

家成はおおげさに喜んで見せ、三人の真ん中に大皿が置かれた。

頼政は食べねば損とばかり黙々と皿へ手を伸ばし続け、他方、広賢はひとつ食べたきりなのに、皿は瞬く間に空っぽになった。

「気に入ったようじゃな、頼政」

「ほんのりとした塩味が絶品でござる。お代わりはありませんかな？」

家成が元興寺に指で合図し、もう一皿振る舞った。

米と小麦の粉を練って縄状にした素朴な菓子だが、食べ始めるとやめられなくなる。頼政はすっかり機嫌を直した様子だ。

「鶴退治は今や、京における最大の懸案となった。鶴を討った者が得る栄誉は計り知れん。むろん褒美は出す。たんまりとな」

「貸し借り帳消しとのありがたきお話、鶴退治はこの頼政がしかとお引き受けいたしました。ただし、似非陰陽師の手は借りませぬ」

「身どもも、人の屋敷を荒らすコソ泥と手を組む気はありません」

「わしは何も盗んどらんぞ！ それに、何べんも謝ったじゃろが」

「謝って済む話ではない」

「わしの話もろくに聞かずに屋敷から叩き出して——」

「問答無用と言ったはずだ」

「のう、二人とも。相手は異形じゃぞ。武士と陰陽師が力を合わせねば、倒せまいが」

見かねて、家成が割って入った。面倒な行き違いがあったらしい。

「平氏と組ませてくだされ」

「全国から法師ほっし陰陽師と唱聞師を募って、今度こそ総力で戦いましょうぞ」

二人は目を合わせようとしめない。先が思いやられた。

「名のある連中は、誰しも様子見でな。面倒なしがらみもあるんじや。とは申せ、素性も知れん有象無象に、鷹の名誉を預けるわけにはいかん。つまり、そちら以外に頼めんのじや」

家成は頼政に向かって身を乗り出した。

「博士と力を合わせて鶴を倒した暁には、帝に奏上してしかるべき官職を与えよう。兵庫頭な

ど如何じゃな？」

空きが出ねば難しいし、すぐには無理だが、何とかなるだろう。

「おお、暮らしが楽になりまするな」

目の色を変える頼政をしり目に、家成は広賢を見やった。

「そちの兄に位階を追贈してやろう。どうじゃな？」

広賢の表情が初めて変わった。いったん微かに晴れた後、逡巡の色を見せたが、頷いた。

家成はコホンと咳払いしてから、続けた。

「されば次の十五夜、鶴を討て」

「五月は現れますまい」

短く応じた広賢は、いつもの澄まし顔だ。

「なにゆえ、出ぬとわかる？」

頼政が尋ねると、広賢は吐き捨てるように答えた。

「知れたこと。満腹だからだ」

「鶴は何を喰つとるんじやな？」

家成の愚問に、広賢は何もない顔で応じた。

「人間の五臓六腑でござる」

例えば牛は草しか食わず、狼は肉しか食べない。似たような話か。

「これまで鶴が現れたのは七回。臓腑を喰われた人間の数は一、二、二、一、五。三月の死者は多数に上れども、喰われたのは七人。四月は現れず、閏四月は十人でござった。量は徐々に増えども、一度に喰える量は限られておる様子」

「確かに今月はたらふく喰いおった。となれば、奴は六月に現れるのか」

家成が身を乗り出すと、広賢はそのぶん身を引いた。

「晴れば、おそらくは」

「ほう。曇れば、鶴は出ぬと？」

「昨年九月は雨、今年一月は曇り、二月は雨で、いずれも鶴は現れませなんだ。人間にとっての陽光のごとく、鶴は月影を欲しておる様子」

「なにゆえ鶴は月を求めるんじゃ？」

「まだわかりませぬ」

「ふむ。鶴といかに戦うかじゃが、何しろ相手の得体が知れぬ。頼政は猿じゃと申したな？」

「いかにも。されど、多くの者は虎じゃ、狸じゃ、蛇じゃと申しまする」

頼政が生き残りから聞き取った内容を事細かに披露するが、家成には首をひねるしかない。

「人の噂とは、実にいい加減なものよ。どれが本当なんじゃ、博士？」

「その四つは、おそらくいずれも正しいかと」

「何じゃと？」

「鵠とは、頭は猿、手足は虎、尾は蛇の異形にござる。胴は狸か犬か、猪か」

「やけにはつきりと申すのう」

「身どもは武士たちが逃げ出した後、辻の東から中へ入って、見ておりましたゆえ」

「お主も見たんか。されど、あの闇の中じゃぞ！」

唾を飛ばす頼政を、広賢が冷ややかに見返した。

「そなたには見えぬものが、身どもには見えるのだ」

「さような異形がおるとはのう……」

「他の国にもたまに出る。例えば唐の『山海経』せんがいきょうに記された窮奇は翼を持つ虎で、犬のように

鳴く。同じく饕餮は牛体に人面で虎の牙があり、橐杓は虎体に人面で猪の牙を持つと伝わる。い

ずれも虎と関わりがあり、人間を喰らう化け物だ」

「さすがは博士じゃ。虎と蛇は手強そうじゃが、猿と狸なら弱かろう。気味の悪い生き物がおる

ものよ」

家成は身をすくませ、檜扇ひわうせんでパシリと膝を軽く打った。

「四つの取り合わせは、ただの干支えとの遊びやも知れませぬ」

北東・南東・南西・北西を象徴する干支は、寅・巳・申・乾だ。胴が犬か猪なら、乾という

わけだ。

「なるほど。全方を支配する隙のない異形か。神様も罪な真似をなさるもんじゃ」

「神のせいにするな。鵠は、人間が創り出した異形だ」

家成と頼政が同時に声を上げた。

「そんなことができるんか？」

広賢は面倒くさそうに、頼政を見た。

「むろん、その辺にいる普通の陰陽師には、無理だ。世に伝わる異形や怪異のほとんどは出任せだが、稀に真実も混じっている。そもそも異形とは、死者復活の術を試みる中で、企図せずして創り出された生き物たちだ」

広賢曰く、死者の復活とは、現世にある肉体に魂を宿らせることだ。だが、魂が離れた瞬間から、肉体は朽ち始める。ゆえに新たな肉体を用意するしかない。人間に魂は創り出せぬため、冥界の魂と現世の肉体を組み合わせる術が古来、試みられてきた。人骨を使う例は多いが、誰も成功しなかった。一体丸ごと使っても、元の魂に邪魔されるせいか、必ず失敗する。他方、複数の獣骨を組み合わせるほうが、魂を宿らせやすいという。

「その術が、サムハラというわけじゃな」

広賢が無言でうなづく。

地下水脈のごとく絶えざる闇の流派として、秘かに受け継がれてきた裏の陰陽道は、せいめい清明により大成され、せいじん晴仁により極められたと聞くが、家成は絵空事だとばかり思っていた。

「いつ、誰が、何のために、鶴を創ったんじゃ？ どうやれば、倒せる？」

「まだわからん」

頼政がむうと唸って、腕組みをした。

「困ったことに、鶴のほかにも懸念がござるぞ。刀を使う黒天狗がおり申す」

「天狗など、この世にいない。それは仮面を着けた人間だ」

広賢が冷たい視線を投げてきた。

元興寺に妨害を指図したものの、家成も詳細までは把握していなかった。

慌てて話題を変える。

「むろん次は現れぬゆえ、心配は無用じゃ。ところで磨がやるからには、前回よりも派手な見世物にしたい」

公卿でも有数の家成の財力を用いれば可能だ。摂津源氏の兵力に加え、全国から武者を雇って膨れ上がらせればいい。

「数は力なり。どうじゃな、頼政？」

家成がぶち上げて、あにはからんや、頼政は浮かぬ顔つきをしていた。

「何じゃ？ 万の軍勢を指揮したいとでも申すのか」

「実は先回と同じやり方では、勝てる気がいたしませぬ。博士、わしはどう戦えばいいんじゃ？」

「思案の最中だと言っている」

「いつになったら、思案が終わるんじゃ？」

「まだわからん」

「まったく、頼りない陰陽師じゃな」

「負け犬よりはましだ——」「何じゃと！」

「やめんか」と、家成が二人の間に檜扇を差し入れ、ヒラヒラさせた。

「そちらたちは鵠を倒すために知恵を絞れ。ともかく、手勢は多ければ多いほどよからう。興行に仕組むのは、磨がやる」

「されば、今日はこれにて」

広賢は家成に向かって両手を突き、静かに辞した。

どこか寂しげな優男の背が渡殿わたどのから消えると、頼政が問うてきた。

「広賢の兄、とは？」

「安倍晴仁せいじん、二十七年前に姿を消した天才陰陽師よ」

家成は広賢の父宗明そうめいの代から交流があったから、事情は多少弁わきまえている。

「何があったのでござる？」

頼政の問いに、家成は答えなかった。

陰惨で死穢しえにまみれたあの事件は闇に葬られ、謎として残されたままだ。

5

長い日のおかげで、六月朔日の宴ノ松原はまだ明るかった。

頼政は胸と腕で女の体の震えを感じていた。抱き締めた螢火きやしゃの華奢な体をひんやりと感じるのは、今日が意外に涼しい日だからか。

「案ずるな、螢火。わしが必ず鶴を倒してやる」

五月の十五夜は降雨のせいもあってか、鶴は現れなかった。ところが昨夜、ついに禁裏で人間が喰われる事件が起こったのである。螢火の馴染みの女官だったらしい。

「怖いのです。すぐ近くに鶴がいる気がして……」

鶴の正体は左大臣頼長が立后りつこうした多子たしだという噂が、まことしやかに流れていた。

昨年一月に多子、四月に呈子と入内が続いた後、黒雲と鶴が現れた。禁裏で怪異が起り始め、さらに帝が病臥びょうがするに至り、二后が疑われたのである。

呈子は立后時に二十歳であり、他家への嫁入りの話もあって、人となりも知られていた。これに対し、十一歳で入内した多子を知る者は少なく、悪左府が帝を自在に操るために異形を送り込んだのだと噂された。だからこそ、頼長の懐刀である泰親は、鶴退治を派手に演じながら、わざと負けて見せたのだ、あの指御子が敗れた事情とうまく辻褄が合う、という話である。

「近ごろ、自分が自分でないような気がするのです」

「どういうことじゃな？」

ややあって、腕の中で返答があった。

「以前は果物が大好きだったのに、今は鳥とか魚を食べたいのです。なんて身の程知らずの贅沢ものなんでしょう」

宮中の美食に接すれば、誰しも舌が肥えるだろう。可愛らしい話だ。

「わしも肉は大好物じゃぞ。狩りも釣りも得意でな。何しろ摂津源氏は貧しいゆえ、自分で捕まえねばならん。近頃は鶴ばかり追いかけてるがのう」

ガハハと笑うと、螢火がようやく硬い表情を緩めた。

半月後、頼政は広賢と共に、鶴退治に挑む。

家成はやる気満々で、前回を上回る大掛かりな討伐戦になりそうだ。頼政はその陣頭に立つ。

今度こそ必ず討つつもりだが、相手は異形だけに、何が起るか知れぬ。想いを伝えたいが、もしも命を落とせば、螢火の心に深い傷を残しかねなかった。

恋に悩める頼政はこの日、まだ昼下がりに桜木の^{大岩}へ行った。ちょうど森の向こうに青い単衣が消えるところで、こつそり後を追うと、螢火は^{武徳殿}の地下へ降りて行った。宴ノ松原の西に建つ古い^{殿舎}で、馬場も備え、^{騎射}や^{競馬}などの^{武技}が催される大きな建物だ。端午の節儀の後に大がかりな^{駒牽}を行うが、ふだんはひっそりとしていた。

大岩へ戻って待っていると、ずいぶんしてから、螢火がとぼとぼやって来た。見るからに元気がない。ふらつく螢火を抱きとめ、頼政は懸命に励まし、慰めていたのである。

(螢火は、誰と会っておるのか……)

禁裏も武徳殿の出入りも許しが要るから、多子の遣いだという話は本当だ。後宮内の対立に絡んで、意に添わぬことをさせられているのだろうが、もしも多子が鶴という噂が本当なら、そばにいる螢火の身が危ない。

「そうじゃ、螢火。餅餠へいだんを持って参った。肉も入つとるぞ」

頼政は螢火を促し、いつものように大岩に並んで座った。

懐から竹皮の包みを取り出して開くと、細い手が伸びた。

卵や肉に野菜を混ぜて煮たものを餅で包み、四角く切った菓子だ。

白い餅にかぶりつくくと、口の中でジュワツと甘辛い中身がはじける。今日は細かく刻んだ鶏肉と椎茸だ。

「美味じゃろう？ 京でわしの好きな名所は十指に余るが、中でも法勝寺の八角九重塔が好きだな。あの池のほとりで食う餅餠が格別なのじゃ」

「餅餠を美味しく召し上がるために、お寺へ？」

「食べるだけではないぞ。あの高い塔を下から見上げながら池畔で寝転がっていると、よき歌が次々と詠める。池からは実に心地よい風が吹く。まるで極楽じゃ」

以前、家成に案内してもらった際に任職と仲良くなり、しばしば境内を訪れるようになった。

「塔の天辺からの眺めは日本一じゃろう。鶴退治が終わったら一緒に登らんか？」

「高い所は恐ろしゅうございます」

「目を瞑つむっておれば、怖くはあるまい」

「でも、それでは、何も見えません」

「なるほど。そいつはそうじゃな」

二人で大笑いした。

「法勝寺では、例えばどんなお歌を？」

「よくぞ聞いてくれた」

「庭おもの面おもは まだかわかぬに 夕立の 空澄さりげなくすめる月かな

夕立ちの後、日の光で土の香が立つ中、名月が東山に昇り始める情景を歌った一首だ。

「目に浮かぶようでございます。頼政さまはうっとりとしご覧になっていたのでしょうかね」

「実は、散歩の最中に土砂降りに遭ってしもうてな。雨宿りするうち、現れた景色に心を奪われたんじゃが、体はずぶ濡れよ」

螢火が声を立てて笑う。

「頼政さまはどうして、そんなに歌をすらすら詠めるのですか？」

「頭の中に、万の歌が入よろずつとるからじゃろうな」

頼政は博覧強記ではないが、こと歌に関しては特別の才があった。一度味わった歌は忘れない。もちろん自分が詠んだ歌も、だ。

「それに二六時中、歌を考えとる。とは申せ丸一日、一首も浮かばぬ日もあるんじやが」

「わたくしには、とても……」

もしも頼政が次の戦いで死んだら、螢火はもう歌をやめてしまい、そのまま一生を終えるのだろうか。そう思うと、切なかった。

「のう、螢火。無事に鶴を退治できたら、大事な話があるんじや」

実は、先立って家成には話をしてあった。四条大路の屋敷を訪ね、折り入って頼み事があると願い出たところ、待賢門院派と聞いて面倒くさそうな顔をしたものの、「女官の一人くらい何とかしてやる。とにかく鶴を討て」と引き受けてくれた。障害はあろうが、螢火を嫡妻として迎え入れ、共に暮らしたい。

「きつと、鶴を討ってくださいまし」

螢火のためにも、勝つ。鶴退治さえできれば、螢火との恋も実るのだ。

「任せよ。わしはこう見えて、めっぼう強いんじやぞ」

目を瞑る。おんぼろ屋敷に戻った頼政が、獲ってきた鳥や魚を自慢すると、螢火が子らと一緒に大喜びする、そんな光景が思い浮かんだ。